



# 理由

---

kenshaku

---

三月三日、

今日は、桃の節句。

わたしは、自分で作った七段飾りの雛人形を眺めていた。

だから普通のお雛さまと違って、いたって地味なものだった。

注意をはらいながら持ちあげた。

のは…… 幼かった頃、わたしは男の子たちの遊びに、強い憧れを感じていた。

よかった。

どうかしている。そう思っていたほどだった。

人形だったら、スイッチを入れれば動き出すロボットの方が、まだましに思えた。

そんなわたしが、今は、雛人形を切望し始めていたのだ。

——だから、作ったの……

しまっている。

国の存亡をかけ、大規模な戦争が続き、資源すら底をつきかけている。そして、男女の区別なく、ほとんどすべての者が戦闘員とならなければならないような次代。

——失ってみて、初めて、その大切さがわかるのね。

言い訳のように、そう思い。その思いが、過去の思い出へと繋がっていった。

「急げよ。早くしないと、母ちゃんに叱られるだろ」  
わたしの家の前の道を、二人の男の子が駆けていく。

「待ってよ、お兄ちゃん」

夕焼けに染まってもなお、靴やズボンの裾や洋服にいたるまで、兄弟ともに泥まみれになっているのがわかるほどだった。

「いいなあー」

わたしには、この兄弟がほんとうに羨ましかった。

どろん子になってしまったことよりも、遊びに夢中になって帰りが遅くなってしまったことを心配していたからだった。

——あのペタペタとし、ひんやりとした泥と、遊びたい。

でも、母が許してくれない。

ったことで、わたしは母にひどく叱られた。

そして、決まって、『外出禁止令』だった。

ふと、背後に人の気配を感じて、わたしは振り返った。

「人形飾りか。きみたちの世界では、古くからの習慣らしいね」

う言った。

「さすがですね。アニー教官」

気配を消して、きみに近付いた。わたしが間合いに入る前に気配を察し、わたしが誰であるかを知っていたのだからね。きみは、

わたしの誇りだよ」

教えた男。それが彼だった。

んな彼に感謝の念を覚えずにはいられない。

「それはそうと、まもなく敵が攻め込んでくる。中央が準備を整えるまで、どうしてもここから先へとは進ませられない。一秒でも長く、敵をこの場に停めてもらいたい」

「わたしの最も得意とする戦法ですね」

と伝わってきていた。だから、わたしはきみをこの世界に呼んだ。この世界を救えるのは、きみしかいない。わたしは、本気でそう信じている」

「ご期待に、少しでもそえられるよう。力を尽くします」

礼をしながら力強く、そう言った。

女雛を落とさないように気を付けながら、最上段に左手を伸ばした。

ひょいと立ち上がり、自ら指定の場所に飛び乗った。

す能力は、わたしにはなかった。

んでいた。

「さっ、戦闘態勢に入って」

パン、パン、と手を打ち、彼女たちにそう告げる。

その瞬間、雛人形の形が崩れはじめた。

両手が袖もろともポトリと落ち、腰が割れズルリと滑る。

上半身が倒れ、首がもげる。そして、七段あるひな壇までもが壊れはじめた。

——茶色一色のお雛さまたち。心安まるひと時をありがとう。

謝を言葉にしていた。

ひな壇もろとも雛人形は、一山の土塊となってしまった。

ズー、

土塊の表面が、意識をもったように動き始めた。

それは、上へ、上へと伸びていき、やがて不格好な巨人となった。

なさい」